

長島愛生園におけるハンセン病視覚障害者と点字習得

Visually Impaired People with Hansen's Disease and Braille Acquisition
in National Sanatorium Nagashima_aiseien

立花 明彦

TACHIBANA Akehiko

<要旨>

戦後、プロミンの実用化によってハンセン病は著しい回復をみせるようになったことから、人権主張として絶対隔離を厳しく定めていた「らい予防法」の改正を求める入所者の運動が活発化する。その中で視覚障害入所者も触発され、極めて困難とみられていた点字の習得に挑んでいる。本稿は、その活動について長島愛生園での実態に焦点を当て、学習に至った経緯、学習方法、習得によってもたらされたものを明らかにし、ハンセン病視覚障害者にとっての点字の存在を考察するものである。

ハンセン病視覚障害者にとって点字を欲する思いと点字習得によってもたらされたものは、単一視覚障害者以上であったことを彼らの生きてきた足跡からみることができる。点字の習得は彼らに自信と可能性を与え、人間としての自己の存在を目覚めさせ、生活の改善、人権保障への活動へと駆り立てた。

1. 研究の背景と目的

ハンセン病は、らい菌により末梢神経が侵されて、顔などに外形的変化を起こす感染症である。その感染力は極めて弱く、戦後は特效薬で完治する病気となった。自律神経損傷としての後遺症は体温調整などの困難をもたらし、末梢神経損傷によるそれは知覚麻痺などをもたらす。同時に、兎眼による角膜の乾燥、外傷感染、熱こぶの際の虹彩毛様体炎などのらい反応、直接、らい腫性病変などにより、視覚障害を併発することもある。このため、視覚障害を負ったハンセン病患者、ならびに回復者は少ない。

視覚障害は歩行と文字の読み書きの不自由をもたらす。一般に、視覚障害リハビリテーションでは、これらを改善するためにいくつかのプログラムが提供される。白杖による歩行訓練や点字の読み書きがそれである。こうしたリハビリテーションは日本の場合、1970年代に入って本格的に導入されたものであり、戦前・戦後の時代には失明軍人を除き、具体的な対応は無に等しい。ましてやハンセン病療養所にあってはなおさらである。

一般にハンセン病療養所では、患者に各種の強制労働が強いられたが、視覚障害を伴う患者、および元患者の場合、重傷者としてそれらは免除された。とはいえ、1950年代前半ころまでのハン

セン病視覚障害者は、これといった生きがいを見出すことはなかった。「点字愛生」には、「ハンセン氏病盲人は、過去社会の偏見と忌わしき因習に白眼視されて狭い殻の中でなんの希望もなく、暗い不自由室で喰って寝て起きて部屋の片隅で首を振りながら空虚な日々をおくり、同病の軽症者からも「座敷豚」と罵られたことさえありました。」(*1)の記述がみられる。これは、愛生園開設時から20年が経過するころまでの視覚障害者のほとんどは、その不自由さを解消できず、意欲的な生活を送れないでいたことを物語っていると言える。

また呂久光明園の職員であった森幹郎は、かつてのハンセン病視覚障害者を次のように記している。

「(前略)このようにして1000を超えるライ盲患者(わが国のライ患者数は約1万5000人)は、ライなるが故の逆境に加えて、点字すら触読出来ないという宿命に泣きつつ、することとてないままに終日部屋の壁にもたれ、布団に潜り込んで首を振り振り生きてきたのである。彼らはただ飲み、食らい、眠り、排泄するだけの、生ける屍でしかなかった。病友達からもやっかい者扱いされ、自らも座敷豚と自嘲して生きながらえてきたのである。(後略)」(*2)

ところで、全国の療養所では戦後、プロミンの実用化によってハンセン病は著しい回復をみせるようになったことから、人権主張として絶対隔離を厳しく定めていた「らい予防法」の改正を求める入所者の運動が活発化する。こうした一般の入所者の行動を見ていた視覚障害入所者も触発される。そこで視覚障害者団体として友の会を発足させ、これを機にいくつかの活動を始めている。

本稿は、その中でハンセン病視覚障害者には極めて困難とみられていた点字の習得の活動について長島愛生園での実態に焦点を当て、学習に至った経緯、学習方法、習得によってもたらされたものを明らかにする。その上で、ハンセン病視覚障害者にとっての点字の存在を考察することを目的とするものである。

2. 長島愛生園の概要

全国には13の国立療養所と二つの私立療養所が点在する。それぞれの療養所は、立地条件や気候、施設の規模など異なるため、生活の実態にも特徴的なことがあるように推測される。

愛生園のある長島は、岡山県瀬戸内市の沖合に浮かぶ周囲16kmの島である。島全体がハンセン病療養所で、西側が呂久光明園、東側が愛生園になっている。1988年、悲願の架橋建設が叶い、今日では陸続きとなっているが、以前は社会から隔絶された島であった。

長島愛生園の歴史は1930(昭和5)年に始まる。この年、わが国における最初の国立療養所として開設された。初代園長は、隔離政策を強硬なまでに推し進め、ハンセン病政策において政府に対しても絶大なる発言権を持っていた光田健輔である。

愛生園の2008年8月1日現在の入所者数は367名、平均年齢は80.03歳、平均在園年数は54年である。また、長島盲人会には72名が属し、平均年齢84.05歳(2008年3月現在)となっている。

ハンセン病政策の歴史を辿ると、愛生園が開設された翌年の1931(昭和6)年、「らい予防法」が成立した。この法の成立後、わが国では絶対隔離が行なわれるようになり、無らい県運動がこれを後押しし、強制収容が展開されるようになる。とはいえ、療養所での生活は決して「療養」と呼べるものではなく、強制労働を始め入所者にいくつもの苦難を強いた。そうした中、愛生園にあっては1936(昭和11)年8月、入所者が包括的な待遇の改善を求めて立ち上がり、ハンスト運動

などを行なった。その結果、待遇改善や作業慰労金の値上げが実現した。入所者は自治会の結成も求めていたが、これについては拒否され、後のこととなる。しかし、このとき作業と売店のみ入所者の自治的運営が許された。

戦後も入所者による運動は続き、1955年、国内の療養所では唯一の高等教育機関となる「新良田教室」が長島に開設され、全国の療養所から若人が入学のために島へやってきた。

3. 点字の習得

3.1 点字講習会

1952(昭和27)年、全国の療養所は「らい予防法」改正運動を巡る混迷の時期にあった。こうした中、長島愛生園では、会員相互の親睦を主たる目的として「杖の友会」(後、長島盲人会と改名)が発足する。会は当初、視覚障害による日常生活での共通する問題や趣味などを語り合ったり、ときに慰めあったりしていたが、具体的な活動の一つとして点字講習会を始めることになった。開催のきっかけについて具体的に記した資料は見当たらないが、この島の西側にある邑久光明園盲人会や群馬県草津町にある栗生楽泉園盲人会の会員が点字を習得し、実用段階に達しているとの情報に触発されたものと推測される。1954年当時、盲人会には約250名の会員がいたが、2月の第1期点字講習会に応募した者は10名であった。

講習会での指導は、点字について既に点訳奉仕可能な知識と技術をもっていた看護婦の磯村シナが務めている。

点字の習得では、読み方と書き方の両方が求められる。このため、学習者の理解や負担、効果的な学習等を考慮し、読みと書きのどちらを先行するかは指導者によって異なる。磯村は、最初に頭の中で点字の五十音の構成を理解させ、これを終わると小学1年生の教科書を教材として用い、読み方を習得させた。さらに、これが一定段階に達したところで点字器による書き方を指導している。

点字の書きにおいて、後遺症のために点筆を握ることの困難な人は、指に点筆を縛りつけたり、作業班の木工部に依頼し、改造点筆を作ってもらい行なっている。また握り易さから、ガリ版印刷で用いる鉄筆を代用した者もいた。栗生楽泉園の盲人会では点字タイプライターを使用していた者もいるが、愛生園ではみられない。

こうして第1期の講習会は約10ヵ月間に渡って行なわれた。10名の終了者には、この間の労をねぎらい園当局から卒業証書と記念品が贈られた。その授与は、園が催した式典の席上で卒業式として行われているが、そこで受講者の一人であった近藤宏一は終了者を代表し、舌読を披露すべく原稿を読みながら謝辞を述べている。そこには、盲人会の活動を園関係者の多くの人々に理解してもらいたいことと、多くの視覚障害者に点字を学習してほしいとの願いがあったと言う。近藤のそれは通じ、1956年時点で指読者、舌読者合わせて約50名が点字を習得し、実用段階に達している(*3)。

3.2 舌読

点字は触読文字であり、一般に手の指を用いて読む。しかし末梢神経を侵されたハンセン病視覚障害者にとって、指での触読は不可能である。ハンセン病視覚障害者で指先の感覚のある人はその指での触読を、指先を活用できない人は唇や舌での点字の読みの習得に挑んだ。第1期講習会では、10名の受講者のうち指先での触読可能な者は8名、舌と唇を使用する者は2名であった。

点字を唇や舌で読むこと、それが可能になるまでの学習の過程は、これを経験したことのない者には想像に絶する苦難がある。前出の近藤は、

「点字は覚えやすい。しかし、これを読むという段階までくると私のように舌と唇を用いる者にはかなり様子が違ってくる。本来の機能とは全く別の働きを舌や唇に強制しようというのだから、無理を生じるのは当然で、簡単なはずの五十音も初めてこれを読み取ろうとする舌や唇にはただ粟粒のざらざらした感じしかない。」と舌読について学習当初の様子を述べている(*4)。点字を習得したい、読めるようになりたいとの気持ちは高まり大きくなる一方で、その成果はなかなかに現れない。近藤の場合は、彼の生活のリズムを変えた。講習会への出席はもちろんのこと、起床から就寝まで食事と治療と楽団の時間以外は文字通り寸暇を惜しんでこれを続けたと言う。長時間、机の前に坐っていると肩や背や腰が痛くなるため、ときどき立ち上がっては柱にもたれながら点字を読んでいる。さらに、居室に誰もいないときには体のしこりをほぐすようにして部屋の中を歩きながらも離さず読み続けた。唇は敏感で、毛ほどの細いものでも感じ取ることができるものの、逆にかぜをひいたり、胃の調子が悪いときにはたちまち感度が鈍くなると言う。舌先も同じで、唾液の分泌を伴うので、一層困難になる。1日のうち、唾液の分泌が著しく盛んになるのは食後の体が汗ばんでいるとき、胃袋が食べ物を消化し終わるところから空腹時にかけてで、このため近藤は、こうした生理的現象をコントロールしながら舌先と唇とを使い分け、覚えていった。そんなある日、同室の老人が近藤の点字本を覗き込み、紙面が真っ赤になっていることを教えた。老人が近藤を見ると、彼の唇の皮膚は破れ、舌先も赤く爛れ、出血しており、それに気づかず読みの練習を続けた結果によるものであった。このとき近藤は、やはり自分には点字の習得は無理だったのかとの言いしれぬ空しさが心の隅から込み上げてきたと語る。しかしながら近藤は舌の回復を待つ練習に励み、最終的にこれを習得し、実用段階に達している。点字舌読者の場合、ほとんどの人がこうした経験をもつ。栗生楽泉園(群馬県)で1952年に点字を習得した金夏日は、点字を書いた紙が唾液で濡れ点字が消えるため、カレンダーの裏紙など厚めの紙に点字を書いて覚えている。しかし読みに集中しすぎ、点字が舌を傷つけ、血が流れ、点字用紙が真っ赤になっているのを晴眼者から教えられたことも何度かあったと学習当初の様子を記している(*5)。

邑久光明園では職員の森幹郎が点字講習の指導を務めている。森は盲人会の機関誌「白杖」に文章を寄せ、舌読に挑み実用化した入所者の秘話やエピソードを紹介していて興味深い(*6)。これによると、舌読に挑む視覚障害者に対し、好奇心と冷やかし気分の交錯した周囲の人々の視線があり、当事者を苦しめた。これは勇気を出して絶望から立ち上がった人々の心をくじいた。点字用紙をなめている姿を想像すると、自分が余りにも哀れになったからである。そんなにまで苦心し、辛い目にあってまで点字を習う必要があるのだろうかと思いつきながらも、幾人かの暖かい人々の眼差しに励まされ学習を続けている。周囲の空気を鋭く悟り、人々が寝静まってから布団を頭からかぶって点字用紙を口に当て、練習した人も少なくない。舌や唇の荒れるのを防ぐために大好物のライスカレーをやめたり、胡椒や唐辛子を断った人もいる。また小豆や胡麻を口に含み、舌端に乗せ、その数を識別して練習に励む人もあったと言う。前出の近藤は、学習当初の苦勞として唾液のコントロールを挙げているが、よだれの出るのははじめのうちで、馴れるとむしろカサカサに乾き、困るくらいになるとの利用者の声を紹介してもいる。普通、舌に触れるのは飲食物であるため、舌に何か触れると条件反射的によだれが出るが、馴れるとやがて舌は飲食物と点字用紙とを識別できるようになるとみえる。

視覚障害入所者のこうした点字の習得に対し、当時、日本盲人会連合の会長にあった鳥居篤治郎

は「点字を唇でさぐり舌で読まれるあの血みどろな努力と、これによって新しい世界を切り開いていこうとする逞しい勇氣にはただ頭が下がり、励まされるのは皆様ではなくて私自身であることをつくづく感じました。」(*7)と敬意を表している。また当時の愛生園・園長の光田健輔は「諸君は普通の盲人さんとは違って指の感覚が麻痺しているから点字の利用は難しいと断念してしまったところ、諸君がまだ残った感覚を見つけて大なる発見を成就して、癩者でも点字の恩恵に浴したことを満腔の感謝を捧ぐるものである。」(*8)と喜んだ。一方で鳥居は「点字の学習によって皆様が新たな世界を発見されたのは嬉しいが、点字を舌や唇で読まれるのはどう考えても私は残酷な気がいたします。それができるならとって感心して見ているわけにはいかない気がいたします。これはなんとか書物を長時間レコードに吹き込むかテープレコーダーを使うか、今の時代に機械によってなされねばならない問題だと考えます。この事は広く社会に訴えたいと思います。英米は勿論、欧州各国ではすでにトーキングブックの図書館さえできつつあります。アメリカのジョンミルトン盲人協会からは、レコードに吹き込んだ月刊雑誌さえ発行されています。日本でも癩盲の方々のためばかりでなく、点字を知らない年とった盲人や病床にいて本を読めない人達のために是非そういうレコードを作ってほしいものだと思います。」(*9)と述べる。ここで鳥居が紹介しているのは、既に米国では実用化していたソノシートを用いた録音図書の導入である。海外事情にも明らかなった鳥居には、当時の技術をもってハンセン病視覚障害者の読書環境をなんとか改善させたいとの思いがあったことを読み取ることができる。日本における録音図書の製作と貸出は、1957年の日本点字図書館に始まるが、療養所への導入はそれから10年余り待たねばならなかった。

4. 点字学習とその習得がもたらしたもの

人にとって文字の習得は、能動的な情報収集活動と自己表現・主張を可能とさせる。ハンセン病によって視覚障害を生じること、点字の習得が困難なことから、文盲の状態に追い込まれることであった。しかし療養所に暮らすハンセン病視覚障害者の中には、他に保有する感覚をもって点字の習得を成し遂げた方々が複数いる。点字の習得は、人々に自信と日常生活におけるさらなる活力を与えるものであった。現に近藤は点字講習会について「……みんなが机の前に肩を並べると、たちまち寺子屋式教室ができあがり、初めて小学校に入ったときの興奮をさえ思い出しながらみんなは喜びを隠し切れなかった。」と記している(*10)。これは、まさに点字への人々の期待を物語るものであり、実際、点字の学習と習得は愛生園に暮らす視覚障害者のその後の起爆剤になっている。

表は、愛生園に誕生した「杖の友会」(後の盲人会)発足前後の視覚障害関係の事柄をまとめたものであるが、ハーモニカバンド「楽団青い鳥」の発足や杖の友会放送劇団、民謡倶楽部などが第1期点字講習会実施前後に結成し、活動を始めていることがわかる。

(愛生園入所者視覚障害関係年譜)

1950 (昭和 25) 年	盲人福祉施設 (ライトハウス) 建設
1952 (昭和 27) 年	杖の友会 発足
1953 (昭和 28) 年	敬和会は『杖の友会』を公認団体として助成することを決定
1953 (昭和 28) 年 11 月	楽団青い鳥 発足

1954（昭和29）年2月	10名の希望者が点字の学習開始 杖の友会放送劇団結成（男子8名、女子1名）
1954（昭和29）年	民謡倶楽部 結成
1956（昭和31）年4月	「点字愛生」創刊号発行。全盲連書面会議での（支部名統一の件）可決により『杖の友会』は『長島盲人会』と改称

さらに点字の習得は、1956年に創刊号を世に送り出した「点字愛生」の発刊に結びつく。「点字愛生」は、愛生園盲人会文化活動の一つとして会員から切望されていたものであり、計画から2年の期間を経て実現する。この機関誌は園内や社会一般での視覚障害福祉について会員の考えや思いを掲載すると同時に、俳句・川柳・短歌・随筆などの文芸作品の発表の場でもあった。発行の意図について当時の杖の友会会長・波多野勘一は「点字愛生の中のありふれた平凡な文章から文芸から私達の実情を知っていただくと共に、何を求めているかを広く世の人々に問う次第である。長く療養所にいる人は物事に慣れてくる、慣れるということは失敗の少ないことであり安定することである。しかしそれは進歩のないことであり、古いともいえる。従って我々は過去のしきたりの埃を払い、しきたりに囚われないで明るい楽しい療園を盲人自らで築き上げるべきである。」（*11）と記している。創刊号は愛生園はもちろん、他の療養所に暮らす人々、あるいはこれを手にした社会の人々に少なからぬ影響を与えたとみえる。波多野は「点字愛生」の次の号において「……その後、多くの方々から便りをいただきました。その便りによって感じたことは、われわれの貧しい文章が、文芸が、1冊の本となって、われわれに対する社会人の認識を深めたという事実であろう。その意味において、われわれの生活状態を活字にするということが、いかに重大な意義を持っているかを痛感したのである。」（*12）と述べてもいる。

視覚障害者自らによる機関誌の発行は愛生園に留まるものではない。1950年～55年ころまでの他の療養所の盲人会をみると、「高嶺」（栗生楽泉園盲人会）、「白杖」（呂久光明園盲人会）があり、これらは愛生園同様点字によるものである。これに対し、大島青松園盲人会は墨字機関誌「灯台」を発行している。

杖の友会の会員の一人であった田中明は「終戦後与えられた民主主義の思想は、私達を徐々に解放しはじめました。人間として生きる権利の保障されていることを知った盲人は、自分達の生活は自分達の手で守らなければならないという意欲に燃えはじめ、社会への啓蒙と相互の親睦をはかりながら懸命に生活向上と文化の発展とに努力しつづけております。」（*13）と語る。ここからも「点字愛生」発行の意味が強く伝わってくる。

繰り返すと、機関誌の発行を可能とせしめたものは点字の習得であり、それはハンセン病視覚障害者に大きな希望と生きる力を与えたとも言え、ここに点字習得の意義を見出すことができる。

5. まとめ

2008年は、現在の6点式点字を考案したルイ・ブライユ（Louis Braille: 1809 - 1852年）生誕200年に当たる。ブライユを生んだフランスを始め、日本を含めた国々では点字の存在に感謝したり、改めてその存在を問い直したり、点字の未来を想像するなど点字関連の各種記念行事が企画されている。ともあれ、点字によって世界の多くの視覚障害者が自ら読み書きできる文字を得、

これによって知識を獲得し、自らを主張したり表現してきた。同時に点字の学習と習得は視覚障害者に生きる力を与えてくれるものでもあり、これぞ「点字力」である。つまり、視覚障害者はこの点字力を得て自身の人生を切り開き、それぞれの時代を生きてきたと言える。その中には、ハンセン病視覚障害者が含まれていることを見逃してはならない。彼らの点字を欲する思いと点字力によってもたらされたものは、単一視覚障害者以上であったことを彼らの生きてきた足跡からみることができる。とすれば、点字により情報を提供してきた点字図書館等は点字使用者である彼らに対し、いかなる対応をしてきたかの検証が求められると言える。

〈注〉

- (*1) 田中明：点字愛生への希望。長島愛生園盲人会，点字愛生，創刊号復刻版，2001，p20.
- (*2) 森幹郎：舌読。白い道標（みちしるべ）—— 呂久光明園盲人会 40 年史，呂久光明園盲人会，1995，p29-31.
- (*3) 波多野勘一：「点字愛生」の意義。長島愛生園盲人会，点字愛生，第 2 号復刻版，2007，p5-6.
- (*4) 近藤宏一：ハーモニカの歌—楽団あおいとりと共に一。近藤宏一，1979。（文献は点字版のみのため引用文は筆者が墨字化した）
- (*5) 金夏日：舌読。点字と共に ハンセン病叢書増補改訂版，皓星社，2003，p106.
- (*6) 前掲 (*2)
- (*7) 鳥居篤治郎：点字愛生に寄せて。長島愛生園盲人会，点字愛生，創刊号復刻版，2001，p5-6.
- (*8) 光田健輔：満腔の感謝を捧ぐ。長島愛生園盲人会，点字愛生，創刊号復刻版，2001，p7.
- (*9) 前掲 (*7)
- (*10) 前掲 (*4)
- (*11) 波多野勘一：点字愛生発刊に際して。長島愛生園盲人会，点字愛生，創刊号復刻版，2001，p11.
- (*12) 前傾 (*3)
- (*13) 前傾 (*1)

〈参考文献〉

- 川上安成：盲人と点字。長島愛生園盲人会，点字愛生，創刊号復刻版，2001，p27。
 小川義秋：機関誌創刊号を祝う。長島愛生園盲人会，点字愛生，創刊号復刻版，2001，p10。

金夏日：増補改訂版 点字と共に。皓星社，2003。

近藤宏一：ハーモニカの歌—楽団あおいとりと共に一。近藤宏一，1979。

栗生盲人会編：高嶺の人びと（記念特集号）。1972。

栗生楽泉園盲人会：湯けむりの園——栗生盲人会 50 年史。栗生楽泉園盲人会，1986。

栗生楽泉園盲人会：続・湯けむりの園——栗生盲人会創立 60 周年記念文集。栗生楽泉園盲人会，

1996.

邑久光明園盲人会：白い道標（みちしるべ）——邑久光明園盲人会 40 年史. 邑久光明園盲人会, 1995.

大島青松園盲人会：わたしはここに生きた——国立療養所大島青松園盲人会 50 年史. 大島青松園盲人会, 1984.

沢田五郎：風荒き中を——ハンセン病療養所で送った青春. 皓星社, 2003.

沢田二郎：「らい予防法」で生きた 60 年の苦闘——第 1 部 少年時代・青年時代. 皓星社, 2002.

沢田二郎：「らい予防法」で生きた 60 年の苦闘——第 2 部 もしもし私は人間です. 皓星社, 2004.

沢田二郎：「らい予防法」で生きた 60 年の苦闘——第 3 部 廃者復活ものがたり. 皓星社, 2005.

(2009 年 1 月 9 日 受理)